

脱皮
フエンテス

ラテン
アメリカの
文学

14



脱皮 フエンテス

内田吉彦 訳

集英社

ラテンアメリカの文学 14

ISBN 4-08-126014-1

脱 皮

内田吉彦訳

CAMBIO DE PIEL
by Carlos Fuentes

1984年4月15日第1刷発行

編 集 株式会社 綜合社
101 東京都千代田区神田神保町3-6-5
電話 03 (239) 3811
発行者 堀 内 末 男
発行所 株式会社 集英社
101 東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話 出版部 03 (238) 2842
販売部 03 (230) 6171
印刷所 中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂印刷所

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

© 1984 Shueisha

ISBN4-08-126014-1 C0397

脱

皮

目次

解説
著作年譜

内田吉彦訳

内田吉彦

449 441

3

脱

皮

主要登場人物

ハビエル 国連機関の研究員で大学の教師でもある。メキシコ人。
エリザベス ハビエルの妻。ユダヤ系アメリカ人。
フランツ ブラハ生れの車のセールスマン。
イサベル ブルジョア家庭に育ったメキシコ人女子学生。

第一部

ありえない祝祭

へ語り手へは九月のある夜、アカデミー・フランセーズで語り終え
ると、エビグラフという古くさい方法を用いることにする。隣のテ
ーブルに座っているアラン・ジュフロアが『書物の時間』を一冊、
彼に手渡す。

……まるでわれわれは起こりそうにもない破滅の前夜か、あり
えない祝祭の翌日にいるかのように……

終ったところで、その本が始まる。ありえない祝祭。そして語り
手は、パレードの登場人物のように、うたを歌い始める前にまず許
しを乞う。

今日、町に入ってくるのときに見えたのは、狭くて、うす汚い通り、それに黄色や青に塗られた、平屋で、すき間だらけの木の大きなドアがついている、どれもこれもよく似た、窓のない家ぐらいのものであった。もちろん、おれは知っている、通りに面した窓や、メキシコ人たちがえらく気に入っている鉄の格子だとか、突き出た日よけがあり、溝のついた平屋根の、小ぎれいな家が二、三軒あるということは。だがその住人たちはどこにいるのだろうか？ あんたには彼らの姿が見えなかった。

彼は四人のインディオの使いが、糧食もなく、そつけない返事をもってトラスカラに到着したのを知る。酋長たちは病いの床にあり、スペイン人に贈物を捧げるためにやってくるができない。トラスカラ人たちはいぶかしげに眉をしかめ、征服者の耳もとで囁くように言う。チヨルールの連中はマリンチュエサを愚弄しております。トラスカラ人たちはコルテスの耳もとに囁く。チヨルラとメキシコの力を侮ってはなりませぬ。チヨルラに進軍す

るために彼らは一万人の戦士をコルテスに提供する。このエストレマドゥーラ生まれの男はにっこりとほほ笑む。千人もいれば足りる。彼は和やかに軍を進める。

しかしいま彼らの周囲にいるのは、この埃っぽい通りに、うようよと集まったみすぼらしい住民だけである。シヨールを頭から被り、裸足で、身籠った、暗い顔つきの女たち。その巨大な腹部と、通りをうろついている犬たちが、この一九六五年四月十一日、日曜日の、チヨルラの生きている印であった。痩せこけた、黄色や黒の、雑種で、ふらふらと、腹を空かせ、よだれをたらし、群をなして走り回る、野良犬たち。通りという通りを、あてもなく駆けずり回り、からだを引っ掻いたり、結局は残飯さえ出てこない溝を掻き回している犬たち。ほかの動物のような眼をしたこの犬たち、つりあがった、赤や黄色い眼つきの、苛立ち、病んだ眼をしたこの犬たち、足が折れたり、もぎとられたりして、つらそうにびっこを引いているこの犬たち、鼻先が白く乾き、蚤だらけのからだで、うとうと眠っているこの犬たち、コヨーテの血をひく、毛が抜け落ち、皮膚にかさかさした大きな疥癬のあるこの犬たち。このさもしい犬たちが、その昔、メキシコの国の神殿であったこのあわれなる町の、ゆつくりとした脈動に合わせ、意味もなく、鼻を鳴らしていた。きたならしい犬と、よく聞きとれない、かん

高い声で、ときれときれにことばをつなぎながら、冗談や内緒ばなしを交わしては笑っている、大きな腹をかかえた女たちの、みすばらしい町。なにを言っているのかは聞かない。

スペインの軍勢が河のほとりに夜営する。インディオたちは小屋をつくり、不寝番が続く。夜間歩哨、山野を走る斥候、夜の冷氣。夜、チョルーラから密使が到着する。鶏ととうもろこしのパンを持ってくる。シャツの襟を開け、頭の毛を乱したままのコレテスが、ベルトを締め直し、隊長の小屋の火を囲むように置かれた、チョルーラからの贈物に感謝の意を表するよう、通訳に命令する。半長靴に、綿のズボンはいた、ヘロニモ・デ・アギラール。黒い髪を三つ編みにし、皮肉な笑いを浮かべる、マリンチェ。

今日、彼らの子孫たちを見かけなかったか？ ひたいが狭く、厚い歯茎に、小さい歯の女たち、髪を短い三つ編みにしたり、素っ気なくうしろで丸め、ショールを被り、大きな腹をかかえ、もう一人子を腕に抱き、あるいは手に連れ、背に負い、自分のショールにくるみ、年よりも早く老けこんでしまった女たち。ニス塗りの、ぴんと張った麦わら帽子を被り、白いシャツに、木綿のズボンをはき、自転車をやつくりと走らせ、あるいは両手でハンドルをもって歩いて行く男たち、なめらかなチョコレート色の肌に、固

くてこわい髪 of 若者たち、薄いあごひげを生やし、すり切れた皮のブーツ、のりの効いたシャツ姿の太った男たち、腰にピストルをぶら下げ、帽子を斜めに被り、顔に刀傷や頬、首筋、こめかみのあたりにあお黒い傷跡があり、うなじをきれいに剃り、歯に楊枝をはさんだ兵隊たちが、うらぶれた姿で、がらんとした広場に面している長いアーケードの柱にもたれている。

夜明けに出陣する。はるかに聖なる都の四万の家々が白く光っている。塔が立ち並ぶ、平原の都市の周囲に広がっている肥沃な耕地に行く。馬上から、エルナン・コレテスは、草地と水を眺め、これなら家畜を放牧することもできるだろうと考えるが、同時にまた、見回せば、多勢の乞食たちが家から家、市場から市場へと巡って歩き、ぼろをまとった、裸足の、不具者たちの群れが、手を差し延べ、腐ったとうもろこしをむしゃむしゃと噛み、そのあとを、腹を空かせて、図々しくなり、眼を赤くした犬の群れが続ぎ、高い塔が聳え立つ町に入って行く彼らを出迎える。とうがらしや、とうもろこし、野菜、竜舌蘭の畑を彼らは越えてきたのであった。壮大なる神殿の四百基もの塔、祠、そしてピラミッド。城塞の前の空地や、広場、そして頭部が欠けている塔からは、ラッパや太鼓の音が起こる。酋長や神官たちが、礼服に身を正して彼らを待ち受ける。アラビア

風に仕立てられた木綿の衣服。コバルを焚いた香炉をかざして、コルテス、アルバラード、そしてオリーを迎える。しかし、トラスカール人たちがいるのを見て、香炉を落とし、旗を打ち振る。敵どもがチョルーラの領土内に入ることはまかりならぬ。コルテスは町の外で野営するようトラスカール人に命令し、セムボアール人、スペイン人部隊、大砲数門に守られて町内に入る。平屋根から住民たちが顔を出し、息をひそめ、茫然自失、あるいは狂喜して、馬、亜麻色や栗色の怪人たち、火器、石弓、大砲、銃、長距離砲の行列を見つめる。太鼓が破れんばかりに鳴り響き、空気を震わせる。

どうして？ 中央にあずま屋があり、耳障りなバンドが休みなくチャチャチャを演奏し、一段落すると、こんどはそれに代ってラジオのスピーカーが、ディスク・ジョッキーのおしゃべりとともに、土地の女性向けにつきからつぎへとツウイストを流している、あの乾ききった公園に行くというのか？ 広場の前に建っているあのぞっとするような彫像を見に行くのか？ グアダルupesの旗とその言い伝えを手にもっているイダルゴのブロンズ像。その後継者たちのことをおれは憶えている。そしていかつい顔をしたフアレスの金メッキの像。彼は羊飼いの、預言者、そして救世主であった。

コルテスが演説する。偶像を崇拜してはならない。人間を生け贄にするのをやめよ。同胞の肉を食してはならぬ。

男色その他の醜行は忘れ去ること。そしてすでに他の有力なる酋長たちが範を示しているように、スペイン国王に恭順を誓うこと。チョルーラの酋長たちが答えて言う。あなた方の王には確かに従いましょう、だがわれらの神々を捨てるようなことはできません。高官たちは互いに笑みを交わす。スペイン人たちが大きな宿泊所に案内し、二日間は平穩無事に過ぎる。だが三日目にはすでに食物がない。古老たちが運んでくるのは水と薪だけである。彼らは嘆き、とうもろこしはもうないと言う。インディオたちがスペイン人から離れる。彼らは嘲笑を浮かべ、ヒソヒソと話し合う。酋長や神官たちの姿が消えた。皇帝モクテスマの使者がスペイン人に言う。メキシコには来て下さるな。静かな町に噂と、かすかな叫び声と、遠く血の臭いが漂う。夜の間に七人のこどもが生け贄にされ、勝利を祈願してウィツィロポチトリの神に捧げられたのであった。コルテスは警戒態勢を布き、最も偉容をはこる神殿から二人の神官をむりやり連れてこさせる。墨染めの木綿の衣服をまとった神官は、モクテスマとチョルーラ人たちの陰謀をマリンチェに打ち明ける。スペイン人は捕らえられ、戦が仕掛けられるであろう。モクテスマ皇帝がチョルーラの酋長たちにいろいろな

約束、宝石類、衣類、純金の太鼓、そして神官への命令を送って寄越した。二十人のスペイン人をピラミッドで生け贄にせよと。二万人のアステカの戦士が、武器を構え、近くの窪地や谷、チョルラ^{Cholula}の建物の中にも、身を潜めている。屋上には胸壁をつくり、道路には深い穴を掘り土手を築いて、スペイン人たちの騎馬戦を阻もうとしている。

今日、この町にやってくると、みんなは広場に沿って、緑や、鼠色、黄色のペンキが剥げ落ち、色褪せ、くすんでしまったアーケードの下を、店に並んだ乾物、へちま、石けん、腐りかけたチーズの嗅いに囲まれて歩いて行った。隣には牡蠣料理屋があり、主人の手でアルミのテーブルが二つと、ブリキの椅子が七つ店先きに並べられていたが、大びんの中の灰色に濁った水に浮いているむかれた牡蠣を食っている人はだれもいなかった。アーケードの中心部を占めているのは役所であった。市庁舎、出納局、第三歩兵大隊司令部。ダークスーツに身を固めた悪徳弁護士、遠くで、手持ちぶさたに、うす笑いを浮かべている兵隊たち。警察署の正面を飾る赤レンガのモザイク。ガルシア兄弟の雑貨屋には、ほうき、刷毛、袋、糸、針金、ごぎ、かが並べられ、用心深く、店の入口の上に、『どなた様も陰口お断り』の看板。

コルテスが意見を求める。一人は、道路を迂回し、ウエ

ホツインゴを経てテノチティトランへ向かうべきであり、その距離は百十キロ程度、と具申する。もう一人は、チョルラの住民と和議を結び、トラスカラに戻るべし、と言う。この陰謀を見逃してはならない、それは別の陰謀を招くことである、と主張するもの。さらには、チョルラ人に戦いを挑むべし、と進言するもの。いかついあごをしたコルテスが断を下す。チョルラを去るように見せかけるため、出発の用意をすること。馬に鞍を乗せ、手綱を引き、武装したまま夜を過ごす。哨戒、見張りが続く。チョルラの夜はしんと静まり、緊張した空気が張りつめる。たいまつ^{torches}の火が消える。歯の抜けた老婆が密かにスペイン人の営舎に忍び込み、マリンチェを脇に呼ぶ。モクテスマの復讐から生きて逃れることを勧め、その上、自分の息子の嫁を迎えることを約束する。スペイン人たちが死に至らしめるあらゆる準備が整っている。マリンチェは感謝し、老婆に待つてくれるよう頼み、コルテスのもとに走る。そして事の次第を注進に及ぶ。

歩きながら、だれも口をきかなかった。みんな疲れていて、生きているのか死んでいるのかわからないようなこの町に感化され、それがまた、ルシラ・エルナンデス嬢や、心やさしい女性ドロレス・パディージャや、美貌のイリス・アロンソのために、つきからつきへとスピーカーから

流れ出るツウィストのやかましい音によって打ち消されるどころか、いっそう強められていた。アーケードの自転車屋で若者が三人、上半身はだかになり、油を差したり、車輪を回したり、駄洒落をとばしては、ばかみたいに笑っているところを、フランツとイサベル、ハビエルとエリザベスは通って行った。浴場からは硫黄の臭いが漂い、敷居のところで、女が一人、中に入ろうとしないこどもを手のひらで叩きながら、花が開いたような腰を見せ、選挙管理事務所の前では、ペンキ屋が建物の正面に書かれた昔の選挙のスローガン、アドルフ・ローベス・マテオスと共に歩むメキシコ地域労働者連合、この前の選挙のときの、グスタボ・ディアス・オルダスと共に歩むメキシコ地域労働者連合、の文字をひと刷毛ごとに消して行き、"未成年者お断り"の看板を掲げた玉突き屋"五月十日"の、自在ドアの向こうには人影も見えず、チョッキのボタンをはずし、襟のない縞のシャツを着た老人が、かかとの先をチョークでゆくりとこすりながら、あくびをするたびに、歯の抜けた黒い窪みをのぞかせ、黒地に銀色の文字で、小児科、皮膚科、性病科、ならびに血液、尿、痰、便の分析と書かれた、角の診療所の前では、女が藤椅子を揺すっていた……インディオたちの笑い声で彼らは眼を覚ます。夜が明け始めると、チョルーラ中が笑っている。コルテスは副官と

砲兵隊の一部を従え、大神殿に向かう。酋長、そして神官たちと相見える。コルテスは彼らを神殿の中央広場に集める。塩、とうがらし、トマトを入れた土なべの準備ができている。黄金の椅子に座すモクテスマ皇帝が、生け簀にせよと命じたスペイン人二十名のための土なべである。コルテスは馬上より声をかけ、高官たちに向かって発砲を命令する。酋長たちは木綿の衣を朱に染めて倒れ、血は神官たちの墨染めの衣と肉体に黒文様を描く。通りに馬の嘶き。銃が轟き、弓が唸りをあげる。乗馬用の牡馬、鹿毛、草毛、栗毛の軍馬が、チョルーラとメキシコの戦士めがけていっせいに襲いかかり、窪地からは冠の羽根飾りが現われ、鳴り響く火薬、砲弾、銃弾、引き絞られた弓、弓矢、弦を迎撃する大太鼓、らっぱ、小太鼓、ほら貝、そして口笛の、耳を聳立てるような音。トラスカラ人たちが、円盾、両手で使う刀、綿をつめた防具に身を固めてチョルーラになだれ込む。火を放ち、女たちを襲い、屋根の上で凌辱する間に、通りでは、羽根飾りの冠と鉄かぶと、唸りをあげる矢と緩んだ弓とが入り乱れる白兵戦が展開される。黒い肉体と白い肉体、胴着と鋼鉄の胸当てとの格闘、引き裂かれたケイトネズミのボンチョ、石投げなわと飛礫、小銃と地面すれすれに矢を放つ弓、悲鳴、らっぱの音、口笛、火に投ぜられた神殿の香、酒樽がたたき割られ、通りをぬらす強い、むっとす

るようなアルコールと血、剣で切り裂かれ、敷居に中身を吐き出したともろこしの袋、鼻先をキャッサバの粉や豚肉の脂だらけにして一目散に走る犬たち、胸に突き刺さっている焼けた矢柄、空中で唸りをあげる石投げなわと石の飛礫、そして、ついに、白い、赤い、軍旗が墜ち、トラスカーラ人たちは、黄金、ボンチョ、綿、塩をかかえ、多勢の裸の奴隷を集めて、通りをねり歩き、チョルーラは悪臭を放ち、流されたばかりの血の臭い、いつ尽きるともなく燃える香、犬のよだれにぬれた豚肉、地面に染み込んだブルケ酒、人間の臓腑、火の嗅いが鼻を突く。コルテスは楼閣、城塞に火を放てと命令を下し、兵士たちは偶像をひっくり返し、破壊する。十字架を建てる場所が石灰で清められ、生け贄にされる運命にあった人たちが解放され、歓声が上がる。五時間にわたる戦いが終わり、三千人に及ぶ死者が道路に横たわり、焼け落ちた神殿の中で灰と化する。「まさに神業だ。スペイン人たちは裏切りを見抜き、復讐する。彼らに敵うものはいない」

かくして大テノチティトランへの道が開かれ、廃墟と化したチョルーラには四百もの教会が建てられることになろう。壊滅した神殿の土台の上に、新しく迎えた朝の中でくすぶる、黒く冷たいピラミッドの基壇の上に。

四人が広場を通過して、聖フランシスコ教会、修道院、イ

ンディオの襲撃に備えた昔の防壁、鋸形の胸壁をめぐらした要塞の方に向かい、その広い前庭に入って行くのをおれは見た。エリザベス、あんたはおれのそばを通ったとき、見て見ない振りをしたが、イサベル、おまえは気まずそうに、立ち止まった。うまいことにだれもそれには気がつかず、みんなはとねりこの木が三本と、松が二本、まんに石の十字架があり、その奥に教会と礼拝堂が直角に立っているだけの、変りばえのしない、空き地を眺めていた。教会には一連のアーチと、扉で囲まれた門番小屋があり、正面の尖頭部にも胸壁が築かれ、入口は黄色、そしてところどころ黒を交えた黄褐色の石でできた控え柱の上にも胸壁が積んである。ハビエルが正面にある長円形の窓の方を指差した。原住民が好んで彫った動物——蛇だわ、いつだつて蛇なんだから、ドラゴナ、あんたは、またもそう思っただろう——石の蛇が、明り取りをとり巻いていた。ハビエルが、入口の上に浮彫りされた石の壺に刻まれている銘を読んだ。

人類の救い主イエス

SPORTAHECAPERTAIT-
PECATORIBUSPENTENTIA

復活祭の日、この広い前庭はインディオたちでいっぱいになる。彼らは折りたたんだ供え物を持ち、ゆっくりと進んで行く。綿布やうさぎの毛皮、イエスとマリアの名前を刺繍したもの、ふき飾りや周囲を縁どりしたもの、ばらや花をあしらったもの、裏と表に十字架を織り込んだもの。石段の前で、両手を伸ばして、ひざまずき、供え物をひたいの高さに差し上げ、そうして頭を下げる。静かにお祈りを唱える。すぐさまこどもたちにも供え物をお見せするよう促し、ひざまずき方を教える。多勢の人たちが、手に供え物をもって順番を待っている。前庭全体に、香の煙やばらの香りが立ち籠め、浅黒い顔に、よれよれの礼服を着、そうでなければ普段の仕事着をていねいに洗濯し、繕った、裸足の人の列が、ただ黙々と待ち続ける。

おれはたばこに火をつけ、あんだ方の動きを追った。イサベルはおれの視線を避けようとしていた。城塞に沿って、黄色に塗られた三つの礼拝堂を、おれはいっしょに見て歩いた。礼拝堂の簡素な造りが、教会の側面入口の装飾と対照的だ。十六世紀の地味な建築に、とってつけたような新しき、嵌め込み式の柱に、ぶどうのつるがごてごてとからまり、一世紀前、チョルーラの金持ち連中がこの聖なる地につくらせたロマンティックな墓に、その精神が受けつがれている、ルネッサンス風の門。木のように見せかけた石

の十字架、石の花飾り、死者に宛てた書状、そのうしろには黒っぽい控え柱と、格子のはまった高窓、裸足のこどもたちが列をなして通り過ぎ、付き添う教義問答教師は憶えの悪いこどもたちの手を叩く棒をもっており、かん高い声が繰り返して唱える。父と子と聖霊と、ただ一人の真実の神。こどもたちは見よう見まねでひざまずく。香やろうそく、金や銀や羽毛の十字架、金糸、銀糸の刺繍や、緑色の羽根細工で飾られた背の高い燭台が供えられる。こどもたちは思い思いの場所に散り、皿や碗に盛ったシチュー料理をお供えする。棒に結ばれた、生きている仔羊や豚が引き出される。インディオたちは祝福を受けるためにその動物を両腕にかかえて段々を上って行き、参拝者の一人が、一生懸命に仔羊の足を抑え、豚のキイキイいう鳴き声を鎮めようとしているのを見て、笑いの波が広がる。

おまえたちが王族礼拝堂の方に進んで行ったので、おれは靴の裏でたばこをもみ消した。イサベルは、もともと吹き放しの列拱^{アーチ}があった七廊式のアラビア風礼拝堂で、その昔、新しい宗教にまつわる神話を楽しみながら学ぶために、前庭にぎっしりと集まったインディオたちの前で、聖餐神秘劇が演じられた場所を、つくづくと眺めるようなふりをしてしながら、こちらを向いたが、ほんとうは、おれがまだそこにいるかどうか見たかっただけで、二人は互いに黒いサ

ングラスのうしろに隠れてしまった。いまはその列拱^{アーチ}が壁で塞がれてしまい、礼拝堂には胸壁、ゴシック式の尖塔、それに怪獣の頭をかたどった屋根の水落とし口がついていた。外から見ると、古いアラビア様式を残しているのは、内部に光を通すガラス窓がついている、幾重もの円屋根だけであった。長い礼拝堂の終わりは、塔のような黄色い鐘楼になっており、そこへの出入りは、両面に紋章がついた木の扉によって行われ、その片面は貧者と腕を組む聖フランシスコの像、もう一面はキリストが受けた五つの傷、原住民流に解釈した五つの傷の奇妙な円盾で、いちばん大きな傷には鳥の羽根や血の固まりがついており、いつ見てもそれはひと握りの野生の桑の実のようであった。

みんなは王族礼拝堂に入って行った。

おれはそのあとを追ひ、入口の所で立ち止まった。

ドラゴーナ、あなたは入口にあるばかりでかい聖水ばちのひとつで指先を濡らした。それがあまりにも不釣り合いなので、あなたの顔がほころぶのが見えた。それは原住民の手になる、磨^すり減った、古い、石の甕^{かめ}で、その昔、チョーラーの生け簀から石斧で取り出した人間の心臓を入れておいたものだ。この象徴的な容器が、アラビア風の円屋根越しに入り込み、火山岩を敷きつめた床の黒ずんだ色を薄めている、真珠色の陽の光と一体になり、火焰につつまれた地

獄の光と、天国の淡い光との中継地、その中間段階を思わせる色調を、ほとんどなにも置かれていない広びろとしたこの部屋に与えていた。嘲笑^{あざわら}の衣をまとい、茨の王冠を戴いた、迫害されるキリスト、苦痛にゆがんだ唇、ひたいの血糊、天を見上げる半ば閉じた両の眼、巻き毛がきれいに波をうっているかつら、レースの短い腰当て、両手に握られた道化の威力を示す杖。それは栄光を失った屈辱の姿であり、祭壇を守っている四人の彩り豊かな大天使からは遠く、むしろ礼拝堂の主要部分を構成している贖罪の苦行のシンボルに近いものであった。浮き彫りされたその祭壇飾りでは、天使たちに囲まれた聖母マリアが、ひげを生やした紳士たち、裸の胴に、ばら色の胸をした貴婦人たち、剃髪^{はらわた}の修道士たち、悔罪のゆるやかな炎に身をゆだねている王様や司教たちの苦業を監視しており、その前には、タビストリーが懸^かつていて、頭蓋骨から冠が転がり落ち、腸^{はらわた}がとび出している、墓の中の司教の遺骸の上で、責め苦にあっている靈魂が火焰に焼き尽されようとしている。

一度死して後の人間の姿

ここにその証あり

インディオたちは広い内庭に腰をおろし、へそのない、